「国際・文化Ⅰ」の授業展開 3

研究部　高　橋　栄　一

1．はじめに

本校は平成４年度から平成６年度までの３年間，文部省から研究開発校の指定を受け，「新教科「国際・文化科」の導入を考慮した教育課程の検討」を開発主題として，実践研究を進めてきた。平成７年度以降も，高等学校指導要領第１章第２款の４に基づき，「その他特に必要な教科」として「国際・文化科」を本校教育課程表に位置付け，継続実践している。

平成７年度の「国際・文化Ⅰ」は，第１単元「自己を取り巻く環境を考える」，第２単元「異文化の人々とわが国の文化や生活を語り合うために」，第３単元「中国を探る」の三つの単元から構成されていた。このうち，第１，第２単元は従前の研究開発以来の単元である。第３単元は，研究開発の指定を離れたため，従来別枠としていた「海外（北京）現地学習（４泊５日，一学年末実施)」を本格的に「国際・文化科」に組み込んで，設けられた単元であった。この平成７年度の単元構成や授業計画は当分の間原則として踏襲する予定であったが，平成８年度の「国際・文化Ⅰ」では，以下の２つの理由から変更することになった。

一つの理由は，平成８年度に実施された本校第16回高校教育研究協議会の開催に関わるものである。研究協議会の際，全体テーマである「“見えない学力”を育てる ― 各教科の試み ―」に最も直接的に関係する教科として「国際・文化Ⅰ」も公開授業と分科会を実施することになり，研究協議会の日程に「国際・文化Ⅰ」の年間計画を合わせるよう変更した。

もう一つの理由は，平成８年度の「国際・文化Ⅰ」を履修する当該学年である本校50回生の「海外現地学習」の日程が大幅に下がり，二年１学期末に実施されるようになったことに関わる。この日程変更により平成７年度の第３単元が一年より二年の１学期に繰り下げられ，逆に，従来２年の「国際・文化Ⅱ」で行う予定であった，「ディベート」学習を中心とした単元を繰り上げることになった。

本校は，これらの変更によって，新たに構成された平成８年度の「国際・文化Ⅰ」の授業実践報告である。また，この実践は，本校荒木重治，岡山正歩，盛加代子，分校淑子，島村潤一郎各教官と私の６人による共同実践である。

2．平成８年度「国際・文化Ⅰ」の特徴と授業構成

前述の通り，平成８年度は11月上旬に本校の第16回高校教育研究協議会が開催され，「国際・文化Ⅰ」では「グループ研究発表」の授業を公開することになった。その際，研究協議会の共通テーマである「見えない学力」の趣旨をより鮮明に反映させるため「国際・文化Ⅰ」では，後で詳述するように「発表」を重視したグループ研究を取り上げることになった。それに伴って，これまで以上に，緻密で丁寧な指導を実施する必要が生じた。そこで，この際，平成８年度の「国際・文化Ⅰ」では，各単元ごとの学習やその指導方法について，これまでの蓄積を一先ず集成してみようということになった。特に，節々で実施されるオリエンテーションや助言指導を充実させ，より明確なかたちにまとめながら授業を進めることを大きな目標に置いた。

平成８年度「国際・文化Ⅰ」の授業実践は〈資料１〉に示す通りである。第１単元では「グループ別討論（ディスカッション)」，第２単元では「グループ研究発表」を従来通り行った。

〈資料１〉平成８年度「国際・文化Ｉ」授業実践記録

月	日	学習内容	諸行事
一学期	４月11日(木) 12日(金)	新入生宿泊研修（医王山スポーツセンター） ・(夜) レポート作成：(テーマ)「国際人とは」，「犯人探し」 ・「国際・文化科」オリエンテーション①「年間計画」など ・「犯人は誰だ」グループ別ディスカッション	・入学式 ・オリエンテーション合宿
	15日(月)	ディスカッション①(目的) ディスカッションのルールを身につけること (テーマ1)「小学校に英語教育の導入は必要か」，(テーマ2)「男女の間に友情は成立するか」	
	４月22日(月)	・３・４限：Ａ組，コンピュータ講習会(時間割り変更) ・５・６限：Ｂ組；コンピュータ講習会 ・　〃　：Ｃ組；金沢市立泉野図書館訪問	
	５月13日(月)	・３・４限：Ａ組；金沢市立泉野図書館訪問(時間割り変更) ・５・６限：Ｂ組；金沢市立泉野図書館訪問 ・　〃　：Ｃ組；コンピュータ講習会	
	27日(月)	オリエンテーション②，グループ研究(ビデオレポート作成に向けて) (課題) ビデオ資料を利用しながら、身近な日本の文化を紹介し、問題提起を行なう。	・中間テスト
	６月３日(月)	◦グループ決定：人数(6～8人)×６グループ→グループ役割分担表提出 ◦テーマ検討→仮テーマ提出	・高校総体
	10日(月)	◦研究・調査の進め方，仮説検討→研究概要(研究手順，仮説，調査方法)の提出	
	17日(月)	◦文献調査による研究の熟成→研究中間報告書提出，ビデオ利用計画提出 ＊ビデオをどのように利用するか	
	24日(月)	◦文献調査，有効な取材の方法検討→取材依頼書＆取材計画書提出 ＊どこで，何を取材するか，	
	７月１日(月)	◦文献調査，コンテ(ビデオ撮影用シナリオ)の概案提出 ＊どのようなシーンを撮影するか	・期末テスト
	15日(月)	◦ビデオ撮影計画提出	・スポーツ大会
夏休み		(ビデオ取材撮影)	
二学期	９月２日(月)	ビデオ編集＆発表準備	
	30日(月)	「経済協力推進協議会－講演と映画の会」講師：田中真紀　演題：「今日のネパール」	
	10月７日(月)	発表日①	
	14日(月)	〃　②	・中間テスト
	28日(月)	〃　③　　総合評価：クラス最優秀賞決定	・スポーツ大会
	11月８日(金)	ビデオレポートグループ発表(本校第16回高校教育研究協議会)	
	11日(月)	各クラス，ビデオレポート優秀者発表	
	18日(月)	オリエンテーション③　ディベートに向けて	
	25日(月)	ディベートグループ、テーマ決定	
	12月２日(月)	資料収集、立論の検討	・期末テスト
	12月14日(土)	全国ディベート連盟北陸支部主催「ディベート講習会」　有志参加　会場：本校 講師：近藤　聡(都立豊島高校教諭)，西沢良文(日本ディベート連盟理事)	
	～冬休み	ディベート準備・資料集め　助言教官との打ち合せ	
冬休み			
三学期	１月13日(月)	ディベート準備・立論の検討，	
	20日(月)	ディベート準備・立論の検討，情報交換	
	27日(月)	ディベート準備・アタックプランの作成	
	２月３日(月)	ディベート①	
	10日(月)	ディベート②	・如月祭
	17日(月)	ディベート③	
	24日(月)	ディベート④	
	３月３日(月)	自己評価，アンケート（予定）	・期末テスト

第３単元では「ディベート」を行った。１年間を締め括る単元として「ディベート」を位置付ける構成は，研究開発指定を受けていた時期にも実践されたことがあった。その時の経験では，ディベートは予想以上に取り扱いが難しく，一年生より二年生の方がより効果的であるという

結論を得ていた。そのため，再び一年生に繰り上げて実施することに，当初一抹の不安があった。しかし，全国教室ディベート連盟主催の「中高生のためのディベート入門講座」が本校を会場として開かれることになり，そこに本校生徒も参加できる，という予期せぬ幸運に恵まれ，結果的にその不安は解消された。講習会が開かれたのが２学期末で，ディベートのオリエンテーションの一部として，年間計画の中に，無理なく組み入れることができたのも幸いしている。

年間計画全体としては，時間的にゆとりを持たせるよう配慮し，特に，研究協議会を控えて，「グループ研究発表」では研究計画，調査資料収集，発表準備の各段階ともに十分な期間を設け発表に至るよう考慮した。そのため，平成７年度に実施した「留学生との交流学習」，「フィールドワーク」は行わなかった。

なお，諸般の事情から１，３学期は月曜の５・６限の２単位で，２学期は月曜の６限のみの１単位で実施された。

以上，平成８年度の「国際・文化Ｉ」の特徴をまとめると次の３点になろう。

① 単元ごとのオリエンテーションや助言指導を充実させ，学習の手法を方法論的に明確にする。

② 「グループ研究発表」では特に「発表」を重視し，発表の授業を，本校第16回高校教育研究協議会の公開授業にあてる。

③ 「ディベート」では全国教室ディベート連盟の手法を参考にする。

３．オリエンテーションと学習指導の概要

⑴ 「国際・文化科」全体オリエンテーション

平成８年度も例年通り新入生宿泊オリエンテーションが４月当初に実施され，その中で「国際・文化科」の全体に関するオリエンテーションが行われた。内容は従来のものと変わらないため，説明は割愛するが，オリエンテーションの際用いた資料は最後の資料編に掲載した**（資料Ａ）**。

⑵ 「グループ別討論（ディスカッション）」

従来，ディスカッションの意義や意味は授業の導入で十分に説明してきた。しかし，実際のディスカッションの技術的な指導は，担当教官に任されてきたのが実情で，どちらかといえば，テーマに対して担当教官が個人的な認識や経験に基づくアドバイスをする，といった指導になりがちであった。したがってこの授業ではテーマに関する認識は深まることはあっても，もう一つの重要な目的である「ディスカッションの技術を高めること」については，曖昧なままにされていた。またそれが，アドバイスに苦労するので，内容的に関わりにくい教科の教官が，授業担当を敬遠したがる原因の一つにもなっていた。

そこで今回は，従来以上にまず，「ディスカッションの技術を高める」ことを念頭に，オリエンテーションを実施した。その際利用したのが「ディスカッションによる学習方法の手引き**〈資料２〉**」である。また，担当教官は，さらに詳しいディスカッションのマニュアルを作成し，具体的テーマに即して事前に十分な打ち合せを行った。

この「ディスカッションの手引き」では，ディスカッションのプロセスを次の７つのステップにわけ，それぞれのステップで何をすべきかというかたちで，ディスカッションの方法を明確化した。７つのステップとは，⑴ 導入と役割分担，⑵ 語意の定義と説明，⑶ 提起された主張の分析，⑷ 討論の視点と討論の方向，⑸ 主張の評価と討論，⑹ 中間発表と討論の深化，⑺ グループと個人の遂行の評価，である。さらに，ディスカッション全体に関わる心得として，

グループ内での個々人の役割と機能などを予備知識として与えた。このプロセスやステップは普通，意識するしないとに関わらず，討論をする時，自然に行っている場合が多い。それを分析的に指し示したに過ぎない。したがって，実際のディスカッションではできるだけ，この「手引き」に添ったかたちで討論するよう指導したが，それは形式を重んじた討論をさせるためではなく，討論の途中で混乱した場合や沈滞した場合，それを正常化させたり，活性化させたりする役割を持たせるためである。また，生徒個々人が積極的に討論に参加するためには，どんな行動や発言が必要であるかを，常に自分自身と対峙しながら客観的に判断させるための材料となることを期待したのである。

〈資料２〉ディスカッションによる学習方法の手引き

ディスカッションによる学習方法の手引き

「ディスカッションのプロセス」

ステップ１　導入と役割分担

（ポイント）生徒の体験なども含め　討論に関する意識や個人的見解などの意見表示を行い　討論する環境を互いに確認し合う。

さらに　それを参考に　司会者　記録者　発表者などの役割分担を決める。

ステップ２　語意の定義と説明

（ポイント）テーマの一つ一つの語句を定義し　グループ全員がテーマに対する正確な共通認識を得る。

ステップ３　提起された主張の分析

（ポイント）主張された意見とその理由をまとめる。賛否両方の意見がある場合は　それぞれの主張点を対比しながら整理する。

ステップ４　討論の視点と討論の方向

（ポイント）討論の視点をどうするか　また　何から討論を始めるか決定　どのように討論を進めるかその方向性を決める。

ステップ５　主張の評価と討論

（ポイント）自己の経験や他の類似した場面との比較などを通じ　主張の根拠や論理についての建設的な批判を述べる。

グループ内の意見について共通点と相違点を明らかにし　相違点の根拠について意見を出しあう。

ステップ６　中間発表と討論の深化

（ポイント）クラス全体のなかでグループ毎の中間発表を行い　グループの意見を，クラス全体の意見と比較し　より　一般的な論点とグループとの差異や特徴性を確認しさらに討論を深かめる。

ステップ７　グループと個人の遂行の評価

（ポイント）最後に　以下の視点で　討論のまとめと評価を行なう。

まとめ　それぞれの主張を正しく理解できたか。

グループはどのような一致点に到達したか。意見の相違は解決できたか。

どんな新　改の問題やさらに明確にしなければならない問題点が残っていたか。

評　価　グループはこれはようまくテーマを取り扱えたか。

討論に大きく貢献したか。誰が協力できていなかったのであれば　それはなぜか。

誰と何が役に立ったか　建設的であったか。

誰と何が討論を妨害したか。

ディスカッションのコツ（上手に討論をするために必要なこと）

1 クループ内での個々人の役割を考える

×参加者は　グループのまとまりと知的能力を高めるという同じ目的に向かって全員が努力している仲間したグループの　員となっなければならない。そのためには　リーダー（司会者）はもちろんのこと　一人一人か　集団を維持する役割を担う目覚と責任を持つよう努力しなければならない。以下は　集団を維持するための様々な役割である。討論の際　今　時分かどのような役割を担っているかを明確化しながら討論に参加できることが望ましい。

(1) リーダー（司会者）　討論全体を進行する。以下の役割を担う人を討論の中で早く判断し　論点の明確化　意見の集約，討論の整理をおこなう。

(2) 観察する人（記録者）　グループの討論過程を記録し，必要に応じて集団へフィードバックする。

(3) 動機付ける人　他者のアイデアを誉める　認める　受け入れる。

(4) 調和をとる人　対立する意見の調停をする　緊張をほぐす。

(5) 仲介する人　各視点　中間的な立場から，他者の立場を明確化させたり，誤りを認めたりする。

(6) 促進をはかる人　他者の参加を励まし　促進する。

2.機能的でない役割行動はさける

(1) 沈黙行動　人が皆の集団のメンバーとみなされるためには他者の意見に耳を傾け自分の意見を述べなければならない。沈黙したメンバーは　必然的には分の役割をはたしていないことになる。

(2) 過剰参加　無闇に発言することは　必ずしも過剰な発言ではない。しかし　集団の目標達成に役立たない話や　集団をはかの有益でない方向に導く話　他者を不快にする話は非生産的であり　期待された成果の達成を妨げる。

3 聞き上手になる

×他者の意見を聞き　その内容をうまく理解するためには　共感能力が求められる。しかし　様々な時点で　色々な理由で　私たちは「無視する」とか「興味を失う」といったよくない聞き方をしてしまう。以下は　私たちが全員時々行ないがちなよくない聞き方である。これらは極力避けるよう努力しよう。

他者と自分自身とを比較し　他者かいっていることにケチを付けようしたり　人を否定的にしか判断しない。

自分の発言内容のリハーサルをしている。

(3)　「グループ研究発表」

従来の「グループ研究発表」では，「研究」に関する指導はほぼ完成されていたが，「発表」については十分な指導ができていないという反省があった。というのは「研究」の善し悪しは，「発表」によって，どちらにも転ぶからである。研究内容が良くても，発表が下手で，評価が下がってしまったり，逆に，内容は今一歩でも「発表」そのものに工夫があり，結果的に高い評価を得るケースも多い。せっかくの研究が報われないケースは，元を正せば，「発表」に関する計画が不十分なまま研究を始めさせて，発表間近になってあわてて発表準備しなければならなくなったという場合であり，これは指導上の問題点でもある。

そこで今回は，その改善策として，「発表」に関する何等かの「条件」を与えることにした。研究当初からその「条件」を克服することを目標にした研究計画を作成させ，準備をさせることによって不十分な「発表」を防ぐことができると考えたからである。その「条件」とは，「映像（ビデオ）による資料を活用した発表」である。

この「映像による資料」を「条件」に選んだ理由は，過去の研究発表で評価が高かったグループのほとんどが，ビデオ，スライド，寸劇など視覚に訴える資料を効果的に利用していたという経験に因っている。今の若者はとにかく映像世代と言われがちで，毎日の生活を見渡してもわかるように，テレビ，ビデオ，映画と我々の生活は映像メディアに取り囲まれている。今では，情報摂取量も接する時間も，映像メディアは活字媒体と同等，あるいはそれ以上というほどになっている。また活字媒体が抽象的，間接的でロジカルであるのに対し，映像メディアはより具体的，直接的でエモーショナルということも言える。つまり，言葉で説明されても抽象的で理解しにくいが，映像で実物を見せられるとはっきりとイメージがつかめるということなのである。これだけ影響力を増してきたものであるにも関わらず，映像による自己表現・情報発進の場は，今まであまり設けられてこなかった。学校教育においても，言語表現の学習は永らく十分に行われてきたが，映像表現となると全く，という状況が続いてきた。そこで，今回，従来にはなかった方法だが，「発表」に「映像表現」を用いてみようと考えたのである。

また，この「条件」を与えることによって，事前の取材計画，調査計画等を綿密に行わせることになり，却って取材や調査の無駄を省き，短期間でより密度の濃い研究，より創作意欲をかきたてられるような研究ができるだろうと予想したからでもある。

当初は，担当者会議で，全グループにビデオ番組を政策させるような研究発表をさせたいという意見もあった。しかし，この「条件」を克服させるには，従来より生徒の負担が大きく，技術的にも困難が予想される。特に，ビデオ機材調達の問題や撮影の技術的な問題，編集は泉野図書館を利用し常に教官がサポートしなければならないなどという環境の問題(注1)から，「条件」を以下の３つのレベルに分けて設定し，できるだけ高いレベルを目標にさせることにした。なお，第２回のオリエンテーションに使用した資料は資料編に掲載した（**〈資料Ｂ〉**）。

・レベル１…主として口頭による発表＋副としてスライド・ＯＨＰ資料を利用する。
・レベル２…主として口頭による発表＋副としてビデオ資料を利用する。
・レベル３…主としてビデオによる発表＋副として口頭による説明・解説を行う。

さらに，この「条件」を付与したため，「グループ研究発表」では，従来の「研究・調査・資料収集」のオリエンテーションに加えて，「映像」について説明する第３回オリエンテーションを実施した。そこでは「映像メディアの作り方」と題して，以下のような撮影用語の説明を中心に，実際のビデオ作品を観ながら，撮影の基本と効果的な撮影方法を紹介した。

第３回　オリエンテーション　資料（抜粋）

○フィックス…これが基本。固定画面のことです。最低５秒は撮っておきましょう。あっちこっちカメラを振り回すと，落ち着きのない映像になって，編集の時に困ります。

○広角・望遠…ズームを最も開いた状態を広角，最も狭めた状態を望遠という。

○被写体深度…ピントの合う距離範囲。広角では近距離から遠距離まで広くピントが合うが，望遠ではこの範囲が狭まる。広角ではピントがあっていると思ってズームしていくと途中でピントがぼけてくることがあるので，ピントは必ず望遠の状態にして合わせる。

○ズーム・イン，ズーム・アウト…広角から望遠に絞ってゆくことをズームイン，望遠から広角へ広げてゆくことをズームアウトと言う。

○フレーム・イン，フレーム・アウト…画面は固定したままで，その画面の中に被写体が入ってくることをフレーム・インと言い，フレーム・アウトその反対。
○フェイド・イン，フェイドアウト…画面がぼんやり浮き出てくることをフェイド・イン，その反対をフェイド・アウトと言う。
○オーバーラップ…二つの画面を重ね合わせること。
○フォーカス・イン，フォーカス・アウト…ピンぼけの状態から次第にピントが合ってくることをフォーカス・インと言い，フォーカス・アウトはその反対。
○パ　ン……カメラを水平方向に動かすこと。あまり速くこれをやると見づらい画面になるので注意。時計の秒針くらいのスピードが一つの目安。
○ティルト……カメラを垂直方向へ動かすこと。
○絵コンテ……何を撮るか，映像の設計図。

「グループ研究発表」のオリエンテーションでは，もう一つ改善点がある。従来，「グループ研究」では調査資料収集の際，公立の図書館が最も大きな役割を担ってきた。幸いなことに，平成８年度は，金沢市立泉野図書館の協力を得て，グループ研究発表のオリエンテーションの一貫として，図書館の利用方法についての説明会が実施できたのである。泉野図書館とはこの「国際・文化科」の研究が実施されて以来，情報交換をする機会も多く，今回，この計画について図書館でも，好意的に受け止めていただき，今後の図書館利用の活性化を図る一つの試みとして，積極的に協力していただくことができた。説明会では，図書館の職員の方に，図書館の役割，図書館で行われている様々なサービス，図書館の利用方法，文献検索の方法，インターネットの利用方法などの講習を受けることができた。説明会は，本校でのコンピュータ講習会と組み合わせて，クラスごとに実施した。

(4)　「ディベート」

一年生では取り扱いが難しい「ディベート」を繰り上げて行うために，これまで実施してきた本校独自の「ディベート学習」をより平易な形にまとめる必要があった。そこで，オリエンテーションでは「グループ研究発表」と同様に，特に技術的な指導を綿密に行うよう留意した（**〈資料３「ディベートの手引き〉**参照」）。

その際，参考にしたのが，前述したように，全国教室ディベート連盟主催の「中高生のためのディベート入門講座」の講習会である。この講習会は，本来，メリット・デメリット（D／M）方式で争う「ディベート甲子園」のルールを習得するための講座である。講習会は２学期末の12月14日（第二土曜）に本校で開催されたが，本校主催でないことや会場の広さの関係から，本校生の参加は自主参加（ただし，これから本校で行うディベートの各論題の賛否両サイドの代表は参加を義務付けた）とした。本校からは30名余りが参加した。講習会は盛況のうちに終えることができ，参加した生徒の感想もかなり好評だった。全員が参加できなかったことが悔やまれる。

講習会では，連盟から経験豊富な二人の講師を招き，「日本はサマータイム制を導入すべし」を具体的な論題に選んで，ゲームを交えながら，初歩から実践までの一つ一つのステップについて懇切丁寧な指導を受けた。最後にはマイクロディベートと称して，簡単な実戦練習も行うことができた。D／M方式はディベート方法の一つだが，「発生過程」「メリットの重要性」「デメリットの深刻性」「フローシート」「アタックプラン」「主張と根拠」などと，厳密な方法が確立されている。そのため，これまで本校では曖昧になっていた，論戦方法，判定基準・判定方

〈資料３〉「ディベートの手引き」

５０回生　「国際　文化Ⅰ」　第４回オリエンテーション　　1996.11.18

ディベートの手引き

1 ディベート(debate)とは

（定義）一つの論題に対し、２チームの話し手が肯定する立場と否定する立場とに分かれ　自分たちの論議の優位性を聞き手に理解してもらうことを意図した　客観的な証拠資料に基づいて議論をするコミュニケーション形態

(※)ディスカッション(discussion)は当事者の同意を形成することが目的

2 ディベートの目的 ― ディベートの利点と到達目標は何か ―

(1) 論理的思考力と論理的表現能力を育てる
(2) 意志決定能力を育てる
(3) 現状改革の発想を育てる
(4) 複眼的思考　360度の発想を育てる
(5) 情報収集能力と情報処理能力を育てる

× ディベートは原則としてゲームです。論破されると悔しいですが　後なしこりは残りません。むしろ論理的に正しく論破されれば、次回は負けないように更になる自己研鑽に向かうのが人間の常だと思います。ディベートというゲームを通して学ぶことは多いハズです。楽しく、かつ有意義にディベートをしましょう。

3 ディベートの方法

(1) ディベートの構成要素
　論題（命題）
　ディベーター（肯定側および否定側　各５人ずつ）
　審査員(Judge　３人)
　・その他　司会（１名）＋タイムキーパー（１名）
　　聴衆　その回のディベート全体を評価する者

(2) 大まかな学習の流れ

① 論題の決定	論題を決めディベーター，審査員などを編成する。
↓	
② 資料 情報の収集，処理	・グループ研究発表に準ずる。
↓	
③ 論理の構築	肯定する理論　否定する理論を構築する。
↓	
④ ディベート実践 ⑤ 判　定 (decision)	賛否両側ともに論理を立証し　相手の論理に反論する。審査員は採点表によって、どちらの主張が勝っていたかの判定を下し　その理由を明らかにする。
↓	
⑥ まとめのレポート提出	・論題テーマごとに、グループ全員が協力して、ディベートの記録をまとめ、レポートを作成する。

(3) グループ編成と実施方法について

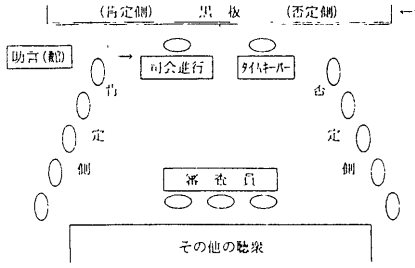
各論題ごとに、ディベーター（肯定側５名＋否定側５名）＋審査員３名＋司会１名＋タイムキーパー１名を選出する。

・審査員および司会・タイムキーパーは　他の論題のディベーターが兼ねる。兼ね方は以下の表の通り。

		審査員，司会，タイムキーパー
１／27	論題Ａ	論題Ｄのディベーターから選出
２／３	論題Ｂ	論題Ａのディベーターから選出
２／10	論題Ｃ	論題Ｂのディベーターから選出
２／17	論題Ｄ	論題Ｃのディベーターから選出

×前回のディベートで負けた方が担当するとよいかも

× 部屋の配置



(4) ディベートの基本

① ディベーターの基本（立論　反論の基礎技術）

論題に対する深い認識を持ち，肯定側・否定側ともに双方の論拠を確かめ　互いの論点を予測しておくことが重要。そのためには十分な準備と、十分な戦略会議を行い　目標を持って参加することが望まれる。実際のディベートに際しては　以下のような点に配慮して行なう。

(a) 相手をやり込めるのではなく審査員（や聴衆）に自論の優位さを訴えることが目的
(b) 論議の前提・目的を明確にする　ここが違えば議論は噛み合わない
(c) 論拠の実証性を論争する　各規的な証拠資料の有無，論理の構成の妥当性
(d) 的確な表現をする　　終始一貫した立場，目標に満ちた態度・発言。相手を威嚇するような不必要な発言は許されない。

② 審査の基本

論題に対する自らの考えに影響されることなく、審査を担当したディベートにおいて、肯定側・否定側のどちらの側が総合的に見てより優れた論議を展開したかを判断すること。引き分けは無し。必ず優劣を付けること。

(a) 審査のコツ　最初から最後まで細目にメモを取る（フローシートを作成する）
　・乱暴は同意とみなす
　　反論および反駁で展開されなかった論議は重要でないとみなす
(b) 判定基準　各論　論理の一貫性，反論・反駁の適切さ，証拠資料の質 量 使い方などスキル（技術）面の審査，表現力（話し方・態度）の審査
　　総論　特に政策論題の場合　双方の意見のうちどちらがより良い結果を生み出すか（メリットはどちらの方があるかorデメリットはどちらが少ないか=メリット デメリット）を判断する。その際の判断基準はより良い社会を築くということを大前提とする。

(5) まとめレポートについて

ディベートをより実りあるものとするためには、やりっ放しではなく、終わった後こそが肝心。なぜ勝ったのか　なぜ負けたのか、判定の妥当性はどうだったのかを確かめ、自分が劣っていたか，勝れていた力などを再確認することは大切。また、論題に対し再度認識を深めるためにも、もう一度振り返ってまとめることは重要。

ディベーターは審査員と協力しながら　ディベートの議論の経過記録を整理し、レポートにまとめる。その際、規定の要項（後日配布）を参考にする。

・ディベーターおよび審査員はディベートの所感を添付する。

(6) 論題の選び方

＊以下の諸条件を考慮し、各クラス論題を４つ選ぶ。

①ディベートが成立するための論題の条件

(a)肯定と否定とに明確に別れる問題であること
　悪い例　「殺人は悪いことである（価値）」　全員が肯定側につくのでダメ
(b)まだ決着のついていない問題であること
　悪い例　「生命は進化する（事実）」　ダーウィン以前ならわかるが
(c)現状の変革を目的とした問題であることが好ましい
　悪い例　「昼食は「たるまや」で取るべきである（政策）」　個人の勝手の範囲
(d)中心テーマは基本的に一つであること
　悪い例　「生徒会の執行副委員長は２名にしその内１名は女子にすべきである。（政策）」　「執行副委員長を２名にするかしないか」　「２名のうち１名を女子にするかしないか」の二つの問題が絡み合い　単純に肯定側否定側に分かれることができない。この場合には、それぞれの問題に対する肯定　否定の組合せで、４つのグループになる。ディベートは基本的に１対１の対立で行なうもの。

②論題の種類

(a)事実論題　現状に関するある事柄を指摘した時，その事実の有無や真偽を論議する。「～である」の形式を採る。

肯定側が勝てば、その提案が事実として認定されたことになる。否定側が勝ては、その提案が事実に反すると認識されたことになる。よって、肯定側は提案を事実と認めさせるために、否定側はそれを阻むことを目標に論議する。

例　「日本人は働き過ぎである」

(b)価値論題　何等かの価値判断を下したとき、その価値判断が妥当であるかどうかを論議する。

肯定側が勝てば、その価値判断が正しいと判断されたことになり、一般に、それを根拠に新たな政策を提案することがさらに目標となる。否定側が勝ではその価値判断が誤りであると認定されたことになり、それを根拠に何等かの政策の実行を阻止したり、あるいは対案を提示したりすることが新たな目標となる。

例　「大学入試における推薦制度は望ましいことである」

(c)政策論題　何等かの現状改革のための政策を提案し　その是非（メリット デメリットの優劣）を論議する。「～すべきである」の形式を採る。

肯定側が勝ては　その提案が実現に向かっていくことになる。否定側が勝ては　その提案の実行が阻まれることになる。よって，肯定側は提案の実行を目標に，否定側はその実施の阻止を目標に論議する。

例　「冬の制服も九月に自由化すべきである」

4 今後の授業日程

11月18日(月)　「国際　文化Ⅰ」オリエンテーション，ディベートについて
　　ディベートのテーマ募集アンケート（事前調査）配布
11月25日(月)　ディベートテーマおよびグループ分け決定
12月１日(月)　ディベート準備，資料収集，教官との打ち合せ
12月14日(土)，日本ディベート連盟主催「中高生のためのディベート入門講座」に参加。各論題毎に３名（肯定側 否定側 審査員の代表者）は参加義務　その他は任意で参加してもよい。
―冬休み―　資料収集
１月13日(月)　ディベート準備，戦略会議　両被立論作成，立論の情報交換
１月20日(月)　ディベート準備，戦略会議，反論以下の戦略を練る
１月27日(月)，２月３日(月)，２月10日(月)，２月17日(月)　ディベート①～④
２月24日(月)　ディベート記録レポート作成，提出
３月３日(月)　自己評価，一年間の感想・反省文を提出

（資料１）ディベートの形式（準理型フォーマット附属高校版）

×肯定側　否定側それぞれ持ち時間１５分の作戦タイムを適宜取ることができる。
持ち時間がなくなった場合は　原則として速答しなければならない。

(ア) 肯定側立論(5分)　論題を肯定する理由　論拠をすべて提示する。
↓
(イ) 否定側立論(5分)　論題を否定する理由　論拠をすべて提示する。
↓
(ウ) 否定側反対尋問(10分)　肯定側の立論(ア)に対する質疑
論拠の格威性　信憑性などを問う
×一問一答形式，時間内で可能な限り質疑応答する
↓
(エ) 否定側反論(5分)　肯定側の立論(ア)および質疑(ウ)の応答に対する反論
↓
(オ) 肯定側反対尋問(10分)　否定側の立論(イ)，反論(エ)に対する質疑
論拠の格威性　信憑性などを問う
×一問一答形式　時間内で可能な限り質疑応答する
↓
(カ) 肯定側反論(5分)　否定側の立論(イ)に対する反論，反論(エ)に対する反駁
↓
（休憩(10分)）
↓
(キ) 否定側反駁(5分)　肯定側の反論(カ)に対する反駁
↓
(ク) 肯定側反駁(5分)　否定側の反駁(キ)に対する反駁
↓
(ケ) 肯定側最終弁論(5分)
↓
(コ) 否定側最終弁論(5分)
これまでの議論を踏まえて，論題に対する肯定　否定それぞれ，自らの主張の正さを論じる。
↓
審査タイム(10分)
↓
判定と講評(15分)　審査員は判定を下し　その理由を述べる。

×最後にその他の聴衆は　肯定側　否定側の論議および審査員の判定およびその理由も含めて　その回のディベート全般について評価表にしたがって評価する。

— 5 —

（資料２）

ある小学校のＰＴＡの会合で持ちあがった「校庭を現在のアスファルトから土に換える」とうわさから

Ｘ　「子どもは土の上で遊んだほうがいいに決まっている①」　→（こども擁護派）
Ｙ　「でもご近所の家はたまらないね②」　→（地域住民派）
Ｘ　「どうして？」
Ｙ　「だって土ぼこりスゴイでしょ③」
Ｘ　「あ、そうか。でも、子どもにはやっぱり土だよ。僕たちの子どもの頃はさ　ドロまみれになって遊んだもんだよ。今のこどもたちはかわいそうたよね」
（中略）
Ｙ　「とにかく私は反対です」
Ｘ　「ダラノ！　このわからず屋！」

（資料３）

①土の校庭がよい理由
環境問題に敏感になる。
天然に敏感になる。
自然に触れられる。
情操教育に結びつく。（他に」に触れるオープンスペースが少ない場合）
勝によい（やさしい）。
野球やサッカーなどの公式戦ができる。

②アスファルトがよい理由
雨が降った後でもすぐに校庭で遊べる。
雨が降った後でも滑って転ぶことが少ない。
・風の強い日でも目に土埃が入りにくい。
怪我をしても破傷風にかかりにくい。
土埃が入らず教室の掃除が楽。また、服も汚れない。

③　③→スプリンクラーを新設すれば解決できる。
地域の住民にとっても土の校庭の方がよい場合もありうる。
——災害時の避難場所になる。一方で、アスファルトは長期の避難場所としては不適切。テントや仮設住宅が建てられないから。

— 6 —

法などについて，非常に有意義な示唆を与えて頂くことができ，その後の指導に大いに役立った。

しかし，この「ディベート甲子園」のルールは一つの完成であり，かなりの実践経験を積み，基本的に話すこと，聞くことに熟達していて初めて戦術的に楽しめるというものである。ディベートという形式を取り入れて，「討論」自体を学ぼうとしている，つまり，戦術以前の段階から始めなければならない本校のディベートの目的には若干そぐわない部分もある。それで，本校の実践ではいくつかの点で，独自の手法を用いることにした。

一つは対戦フォーマットである。「ディベート甲子園」のルールでは，全体でも40分程度で対戦するように仕組まれている。これは，１時限50分を単位とする授業では有効となろうが，本校では２時限続きで実践するため，そのままでは短い。そこで，本校では，やり慣れないためにロスする時間や，判定の講評をする時間も考慮して，時間的にゆとりのあるフォーマットを作成した。また，「ディベート甲子園」のルールでは，どちらかといえば論理構成が最も重視され，進行は機械的である。本校では，多少感情的でもよいから，オーディエンスも乗りやすい雰囲気を作ることを念頭に置き，立論・尋問・反論・反駁などの順序を少し入れ替え，本校独自のフォーマットを作成した（〈資料「ディベートの手引き〉参照」）。

もう一つは審査方法である。一般のディベート大会では，専門的な審査員が判定をする。従来本校では，オーディエンス全員が審査員という形式で判定してきた。この方法では，多数のオーディエンスで審査するため，その判定結果は数で示すことはできても，その理由を公表する場がなく，ディベーターは判定結果についてその理由を説明してもらえない。また，一人一人のオーディエンスにとっても自分の審査についてその評価が十分には得られない。したがって，ディベーターも審査員も自分に対する評価を次回以降にフィードバックしにくいという問題点があった。そこで今回は，審査員を特定少数に限定し，ディベートの最後にその審査員が

合議の上で判定を下し，他のオーディエンスはその審査員の判定を含めてその回のディベート全体の評価をさせるよう改善した。この方法なら，ディベーターはその判定の理由を聞くこともできるし，他のオーディエンスは自分の判定と比較することもできる。全体として，回を重ねることにその経験を実践に生かしやすいと考えたのである。

４．実践を振り返って

ここでは，実践を振り返りながら以上のようなオリエンテーションの効果や新たな問題点などについて，「自己評価表」の集計結果**〈資料４〉**を含めて，簡単にまとめてみたい。

⑴　「グループ別討論（ディスカッション）」

この単元が実施されるのは入学当初ということもあり，例年通り，附中出身者の方がやや口数が多いものの，討論としては活発な意見交換がなされたとは言い難い。「自己評価表」を集計すると，第１回目・第２回目のディスカッションとも９割前後が「他の意見を聞くことができた」と答えてるいのは評価できる。が，逆に言えば，聞くことしかできなかったということの裏返しでもあろう。

昨年から宿泊オリエンテーションの中で始めた「グループ別討論①」の「犯人は誰だ」は，「論理的な議論ができたか」の回答で「できた」「まずまずできた」が約７割りであり，昨年と同様にまずまずの成果だといえる。これは，犯人と犯行方法を推理するという明確な目的が示され，判断の材料が資料の中にすべて含まれており，自己の体験や知識量にほとんど左右されないためだろう。この時期に行なう素材としては適切だったといえる。

「グループ別討論②」では，初めて一般的なディスカッションを行なった。これも自己評価では，約３分の２が論理的な議論が「できた」或いは「まずまずできた」と答えている。「犯人は誰だ」に比べて議論の方向性が不明確なのにもかかわらず，それに近い数が得られているのは，例年に比べて良い手応えだと思う。また，第１回目よりも「グループの意見をまとめる努力」をした生徒が少し増えている。授業中の観察では，ディスカッション中に自己の態度を評価する手立てとして「手引き」を利用する場面も見られた。これらは，単なる２回目だからという慣れ以上に，ディスカッションそのものが活性化したとも判断できる。元々，数回のディスカッションで，その手法を完全に身に付けることは期待などしていないが，結果からみれば，少しは「手引き」の効用があったとも考えることができよう。

⑵　「グループ研究発表」

例年，グループ編成は１グループ５名前後で各クラス８グループを標準としていた。平成８年度は１グループ６～８名，各クラス５，６グループで例年よりグループ数は少ない。これは前述した「条件」を設定したことによって，新たに撮影に関する係等，各班で分担する役割が多くなったことを考慮したためである。なお，必ずメカに強い生徒をグループのメンバーにするよう促したところ，ほとんどのグループが自然に男女混合グループになった。

各グループの研究テーマとそれぞれの研究レベルを**〈資料５〉**に示す。研究レベル毎の数は，レベル１：５グループ，レベル２：６グループ，レベル３：６グループであった。当初は，レベル３まで到達するグループは僅かではないかと予想していた。数だけで見れば，予想を上回って，かなり多くのグループがレベルの高い研究に挑戦したといえる。所感で「テーマ設定は悪かったけど，ビデオを使うという一つの目標は十分に達成できたと思う。」と書いた生徒もおり，初めての試みとしてはまずまずの成果だろう。

〈資料４〉「国際・文化Ｉ」自己評価表とその集計結果

「国際・文化Ｉ」　自己評価　　1997.3.3

「国際・文化Ｉ」ではこの一年様々なことを学んできました。この一年を振り返りながら、以下の項目に回答し、最後に自己評価を行なってください。

回答は、下の４段階に準じて判断し、各々右端の欄に番号を記入してください。

1：十分にできた。	2：十分とはいえないまでも、まずまずできた。
3：あまりできなかった。	4：全くできなかった。

〈集計結果〉

新入生宿泊研修：グループ別討論①「犯人は誰だ」 について

	1（%）	2（%）	3（%）	4（%）
（1）討論に参加できたか。（積極的に発言ができたか。）	42（36）	46（39）	24（21）	5（ 4）
（2）論理的な議論ができたか。（感情的な発言を押さえることができたか）	28（24）	53（45）	34（29）	2（ 2）
（3）グループの意見をまとめるように努力したか。	13（11）	48（41）	41（35）	15（13）
（4）他の意見に耳を傾けることはできたか。	70（60）	40（34）	7（ 6）	0（ 0）

グループ別討論②「小学校に英語教育を導入すべきである」 について

	1（%）	2（%）	3（%）	4（%）
（5）討論に参加できたか。（積極的に発言ができたか。）	35（30）	41（35）	38（32）	3（ 3）
（6）論理的な議論ができたか。（感情的な発言を押さえることができたか）	23（20）	50（43）	43（37）	1（ 1）
（7）グループの意見をまとめるように努力したか。	17（15）	39（33）	51（44）	10（ 9）
（8）他の意見に耳を傾けることはできたか。	66（56）	37（32）	13（11）	1（ 1）
（9）討論を通じて、テーマに対する認識、興味関心が深まったか。	24（21）	51（44）	36（31）	6（ 5）
（10）討論の楽しさ，重要性，醍醐味が理解できたか。	32（27）	38（32）	42（36）	5（ 4）

（11）その他、討論に関して感想、意見があれば書いてください。

（省略）

金沢市泉野図書館訪問 について

	1（%）	2（%）	3（%）	4（%）
（12）図書検索などを含め、公立図書館が手軽に利用できるようになったか。	68（58）	29（25）	16（14）	4（ 3）

（13）その他、図書館訪問に関して感想、意見があれば書いてください。

（省略）

コンピュータ講習会 について

	1（%）	2（%）	3（%）	4（%）
（14）ワープロソフトが利用できるようになったか。	33（28）	34（29）	29（25）	21（18）
（15）講習会を契機に、積極的にコンピュータを利用できるようになったか。	22（19）	28（24）	37（32）	30（26）

（16）その他、コンピュータ講習会に関して感想、意見があれば書いてください。

（省略）

グループ研究 について

	1 (%)	2 (%)	3 (%)	4 (%)
(17) 事前のテーマ設定や調査内容、調査項目の検討ができたか。	31 (26)	60 (51)	26 (22)	0 (0)
(18) 必要な調査や資料収集ができたか。	40 (34)	48 (41)	24 (21)	5 (4)
(19) 調査や資料収集に関する協力者への応対が正しくできたか。	49 (42)	48 (41)	15 (13)	5 (4)

(20) 調査先・資料入手先、調査方法について（該当する記号を○で囲む。複数可）

ア, 学校図書館(29%) イ, 公立図書館(70%) ウ, 官公庁(37%) エ, 校内アンケート調査(25%)

オ, 校外での聞き取り調査(43%) カ, 実地見学・体験調査(60%)

・その他(具体的に)（電話帳　など　　）

(21) 分析・考察に関しては、グループ内で十分話し合うことができたか。	27 (23)	52 (44)	31 (26)	7 (6)
(22) 全員で協力して研究することができたか。	37 (32)	40 (34)	34 (29)	6 (5)
(23) 研究の結果、テーマに関して理解を深めることができたか。	53 (45)	42 (36)	19 (16)	3 (3)
(24) ビデオ，ＯＨＰなどの器材を効果的に使って発表ができたか。	39 (33)	39 (33)	37 (32)	2 (2)
(25) よくまとまったor工夫した見易いレジュメができたか。	39 (33)	47 (40)	27 (23)	4 (3)
(26) 十分に研究内容を伝達することができたか。	24 (21)	49 (42)	36 (31)	8 (7)
(27) 聞き手として、発表者の意図を理解しようと努力できたか。	47 (40)	56 (48)	11 (9)	3 (3)
(28) 他のグループの発表内容・方法に啓発されたか。	37 (32)	53 (45)	23 (20)	4 (3)
(29) 評価表に際しては、自分なりに客観的に評価ができたか。	57 (49)	48 (41)	12 (10)	0 (0)

(30) その他、グループ研究発表に関して感想、意見があれば書いてください。

（省略）

ディベート について

	1 (%)	2 (%)	3 (%)	4 (%)
(31) 立論(メリット・デメリットとその発生過程および重要性・深刻性)作成に関しては事前に十分な資料収集ができたか。	39 (33)	37 (32)	35 (30)	6 (5)

(32) 調査先・資料入手先、調査方法について（該当する記号を○で囲む。複数可）

ア, 学校図書館(48%) イ, 公立図書館(79%) ウ, 官公庁(3%) エ, 校内アンケート調査(0%)

オ, 校外での聞き取り調査(4%) カ, 実地見学・体験調査(4%)

・その他(具体的に)（インターネット，電話サービス，映画　など）

(33) 立論作成に関しては、グループ内で十分話し合うことができたか。	45 (38)	34 (29)	30 (26)	8 (7)
(34) 反対尋問・反論に関して、事前にアタックプランを十分に用意できたか。	33 (28)	36 (31)	42 (36)	6 (5)
(35) 実際のディベートでは満足できる立論ができた。	44 (38)	43 (37)	24 (21)	6 (5)
(36) 実際のディベートでは満足できる反対尋問および反論ができたか。	31 (26)	47 (40)	33 (28)	6 (5)
(37) 実際のディベートでは満足できる反駁ができたか。	22 (19)	38 (32)	44 (38)	13 (11)
(38) 実際のディベートでは、満足できる最終弁論ができたか。	33 (28)	39 (33)	30 (26)	15 (13)
(39) 自グループのテーマに関して理解を深めることができたか。	78 (67)	22 (19)	14 (12)	3 (3)
(40) 他グループのテーマに関して理解を深めることができたか。	39 (33)	50 (43)	26 (22)	2 (2)
(41) 評価表作成に関しては、自分なりに客観的に評価ができたか。	58 (50)	44 (38)	13 (11)	2 (2)

以下、(42)～(43)は審査員経験者のみ回答しなさい。

	1(%)	2(%)	3(%)	4(%)
(42) 自分なりに客観的に審査できたか。	25(57)	14(32)	4(9)	1(2)
(43) 審査結果の講評では他のオーディエンスを説得できたか。	15(29)	19(37)	15(29)	2(4)

以下、(44)は司会・タイムキーパー経験者のみ回答しなさい。

(44) 自分の役割に関しては、満足できる働きができたか。	19(54)	10(29)	5(14)	1(3)

(45) その他、ディベートに関して感想、意見があれば書いてください。

（省略）

年間の学習活動を通じて

※ 以下の各項目の能力や態度に関して、高校入学時に比べて、どれくらい向上したと思いますか。４段階で評価し、良いほうから順にＡ～Ｄを記入してください。

	1(%)	2(%)	3(%)	4(%)
(46) 情報を収集し、適切に処理すること。	40(34)	63(54)	12(10)	2(2)
(47) 自己の意見を持ち、それを集約し、表現すること。	47(40)	51(44)	14(12)	5(4)
(48) 自ら課題を発見し、それを解決・実践すること。	19(16)	52(44)	38(32)	8(7)
(49) 新しく得た知識と既得の知識を総合すること。	38(32)	53(45)	21(18)	5(4)
(50) 物事を多角的に見るて、判断すること。	42(36)	49(42)	23(20)	3(3)
(51) 自己の生活する地域の環境の特質を認識する態度。	22(17)	44(38)	45(38)	6(5)
(52) 異質な文化や価値観を理解し、尊重する態度。	39(33)	49(42)	24(21)	5(4)
(53) 自己と世界の関わりに関して認識し、展望してゆく態度。	33(28)	44(38)	30(26)	10(9)
(54) 自己の尊厳を自覚し、地球社会の一員であることを認識する態度。	24(21)	56(48)	27(23)	10(9)

総合的な自己評価 について

※ 以上の(1)～(54)を踏まえて、自分の「国際・文化Ｉ」に対する総合的な自己評価を４段階（Ａ～Ｄ）で評価してください。

A(%)	B(%)	C(%)	D(%)
26(22)	66(56)	20(17)	5(4)

以下はアンケートです。自己評価とは関係ありませんが、参考までに回答して下さい。
答は上記に準じて次の４段階で記入してください。

1:全くその通り，　2:やや思う，　3:あまり思わない，　4:全くそうではない

	1(%)	2(%)	3(%)	4(%)
(ア) 「国際・文化科」は、興味を持って取り組めた。	43(37)	56(48)	14(12)	4(3)
(イ) 「国際・文化科」は、他の教科の負担に感じた。	10(9)	42(36)	37(32)	28(24)
(ウ) 「国際・文化科」は、他の教科の学習に役立った。	8(7)	30(26)	60(51)	19(16)
(エ) 「国際・文化科」は、行事やクラブ活動の負担になった。	11(9)	48(41)	26(22)	32(27)

※自己評価に関する講評(その総合評価にした理由)および一年間「国際・文化Ｉ」を学んだ感想や意見等を書いてください。

（省略）

しかし，実際には資料として「ビデオ映像」を十分に利用できていた，とはいえないのが実情である。筆者はかつてＮＨＫ放送コンテストを見る機会があり，高校生の潜在能力の高さに驚いたことがある。ついそれと比較してしまうので，そう思うのかもしれないが，もっとやれたはずだ，というのが正直な感想である。本校研究協議会の公開授業の反省会でも，期待したほどではなかった，という忌憚のない意見も頂戴した。ご尤もな意見であろう。

何故，そこまでできなかったのか。「全体的に考察に重点を置いているグループは少なかったような気がする。言い方は悪いが，研究した事実だけを発表していたグループが（自分たちも含めて）多かったと思った。」と所感に記した生徒がいたが，まさに問題の核心を突いた感想である。つまり，「ビデオ」を使わせることに神経を使いすぎて，研究内容にまで指導が行き届かなかったのである。準備段階では映像資料利用計画を数回提出させ，撮影計画には十分な時間を与えて準備させたつもりだった。しかし，いくら時間をかけ，助言指導を度重ねても，研究内容が完全に煮詰まっていない段階では，あまり効果はなかった。調査・取材に費やした夏休みを終え，発表へ向けて内容をまとめる段階になって初めて，撮影した資料が充分でないことに気付くことも多かった。そこには，生徒側も常日頃映像メディアに親しんでいるだろうから，それほど微に入り細を穿って説明しなくてもわかるだろう，という勝手な思い込みがあったのだろう。メディアに親しんでいるといっても，レポート番組をどれだけ見ていたか怪しいし，見るだけの立場からでは，創ることには何の足しにもならない，ということを改めて痛感させられた。

第３回オリエンテーション「映像メディアの作り方」ではカメラの使い方が中心だったが，どうしたら見易い映像が撮れるかという指導より，どの様な資料を映像にしたら効果的か，という指導の方が重要だったのではないだろうか。Ｂ組は筆者が担当したクラスであるが，他の２クラスに比べレベル３の研究はなく，レベル１が４グループ，レベル２が２グループであった。これはビデオ利用に対してはできるだけ意味のある資料として使用するよう強く指導した結果，かえってビデオが利用しにくくなってしまったからだろう。本来，ビデオを使うなら動いている事によって資料価値が高くなるものでなくては意味がない。静止画像で十分に伝わるなら，写真，スライド，ＯＨＰでよい。他のクラスでも，実質的にビデオでなければならない資料は多くはなかったように思う。もし，Ｂ組と同様に強く指導していたら同じ結果になったかもしれない。

さて，次に「グループ研究」の準備の一貫として実施した，「コンピュータ講習会」について少し触れておく。現在の趨勢を考慮して，パソコンなどには早いうちから少しでも，慣れさせておくことが必要である。そのきっかけを作るための講習会なのだが，１回（50分）限りの講習会で習得できるものではないし，逆に，既にワープロやパソコンを使いこなしている生徒にしてみれば物足りない，という中途半端な講習会になっているようだ。少しでも触れる機会を増やそうと「国際・文化Ｉ」では「研究発表」のレジュメや所感をワープロやパソコンのワープロソフトで作成するよう指導している。しかし，最後は，グループの中で使いこなせるものに任せてしまうことが多い。キーボードを触ったことも無かったが，これを機にその後，パソンに親しむようになったという生徒は，あまり多くないのが実情だ。従来「コンピュータ講習会」は，「国際・文化科」の授業として行っているわけではなく，ホームルームの時間や，本校情報部が主催して放課後に行ったこともある。「国際・文化科」としては，出来るだけ多くの生徒が手書きから卒業してほしいと思うが，講習会をこの授業に組み入れる必要はないと考える。授業とは別に自由に参加させる方向で実施する方がよいかもしれない。

以上，「グループ研究発表」では，例年より細心の注意を払い，準備段階から時間をかけて十

分な指導をしたつもりだったが，結果的に「映像」を資料として利用させるとなると，少しも十分ではなかった，というのが全体を通じての反省である。「番組」を作るには，それこそ１年をかける必要があるのかもしれない。はじめから，学校に編集機材もない，専門のスタッフもいないという指導体制では，全員にやらせるには些か無理が過ぎたのかもしれない。

しかし，「夏休みが研究期間となったので，様々な所へ行って取材調査をしたり，時間をかけて考察を考えることもできてよかったと思う。」また，「グループ内の役割分担をすることによって，自分の仕事に責任を持つという態度が形成されたと思う。」と様々な肯定的感想もある。さらに，自己評価の集計でわかるように，資料収集に際しては，公立図書館を利用したり，実地見学・体験調査などをした生徒が非常に多い。その意味では今回の「グループ研究発表」では最低限の目標は達成されたとみなして良く，今後，グループ研究の完成形を目指すための一つの方法としては誤りではなかったと自負している。

〈資料５〉50回生　グループ研究テーマ一覧

組	テ　ー　マ　（カッコ内の数字は研究レベル）			
A組	金沢の交通渋滞を見なおす	(2)	地域に愛される自衛隊	(3)
	包装について	(3)	ペットについて	(2)
	警察	(2)	自動販売機について	(1)
B組	おいしい水について	(1)	ファーストフード	(1)
	音の影響	(2)	ゴミ問題	(2)
	今，食品が危ない　―食品添加物は本当に安全か―	(1)	金沢の動物園を考える	(1)
C組	登校拒否について	(3)	リサイクルについて考える	(3)
	伝統産業における日本人と外国人の意識の相違	(3)	受験について	(2)
	平和町の今昔	(1)		

(3)　「ディベート」

まず，ディベートのテーマ（論題）の選択方法を記す。例年，テーマによって「ディベート」し易さ，指導のし易さが異なり，どのようなテーマを選ばせるのかは頭の痛い問題であった。生徒の希望に合わせると，内容的に深みの無いものになってしまう可能性が高い。一方，教官の指導し易いテーマを選ぼうとすれば，生徒の興味関心と合わなかったりするからだ。

そこで，今回は十分に時間をかけて，できるだけ民主的な方法で，テーマを選定した。具体的にはアンケートによる希望調査を利用した。調査ではオリエンテーションで説明したとおり事実論題，価値論題，政策論題の３分類にわけて，それぞれ一つずつ以上，各自自由に希望を書かせた。その希望に，各クラスの担当教官の希望を加えて投票を重ね，テーマを絞りこんだ。さらに，時間をかけて絞りこまれたテーマについて，各自がどれを選ぶか，賛否どちらサイドにつくか自由に選択させた。対決する相手を知って選ぶことも多かったからである。

実戦に選ばれたテーマは**〈資料６〉**の通りである。これを見ると事実論題が選ばれていないことがわかる。希望調査の時には，「日本人は閉鎖的である」，「日本人は余暇の過ごし方が下手である」などいくつも事実論題が候補にあがったが，価値論題や政策論題に比べて，焦点が明確でない，資料が集めにくいという点が生徒に敬遠されたのか，最後まで残れなかった。結局，例年取り上げてきたような無難なテーマに落ち着いた。

〈資料６〉50回生　ディベートテーマ一覧および判定結果

組	月　日	テ　ー　マ　（論題の種類）	審判の判定		オーディエンスの判定	
			肯定	否定	肯定	否定
A組	２／３	中学校を義務教育から外すべきである。（政策）	×	○	×	○
	10	安楽死を認めるべきである。（価値）	○	×	○	×
	17	癌は告知すべきである。（価値）	○	×	×	○
	24	死刑制度は廃止すべきである。（政策）	○	×	○	×
B組	２／３	日本は徴兵制を導入すべきである。（政策）	×	○	×	○
	10	新聞に高校の合格者の氏名を載せるべきである。（価値）	○	×	○	×
	17	死刑制度は廃止すべきである。（政策）	×	○	×	○
	24	安楽死を認めるべきである。（価値）	×	○	×	○
C組	２／３	土曜休日は廃止すべきである。（政策）	×	○	○	×
	10	安楽死を認めるべきである。（価値）	○	×	×	○
	17	死刑制度は廃止すべきである。（政策）	○	×	×	○
	24	原子力発電は必要である。（価値）	×	○	×	○

※オーディエンスの判定は多数決による　　○：勝ち　×：負け

各自自分のテーマが決まった後，ディベートへ向けての具体的準備作業が行なわれた。今回は立論やアタックプランの所定の用紙を準備したため，例年に比べて，作業がしやすかったように思う。また，最初の１・２回の授業はできるだけ，議論が噛み合うよう，賛否両サイドある程度情報交換をさせたのも効果的だった。中には，調べていくうちに，反対側の主張の方が自分に合っていることに気付く生徒もいた。調べ始めて初めて自分の価値観が明らかになったということであり，それはそれで一つの成果ではある。が，一年生では自分の価値観や考え方と異なる立場でディベートするのは難しい。せめて，選択する際に，もっとテーマに対する賛否両方の資料を提示すべきだったのかもしれない。

実戦では，立論の際に，準備した原稿を読むだけだったり，予定外の反論を受けて徒に作戦タイムを消費したり，また，審査が混乱したりと改善すべき点は多い。このことは，ディベート講習会でも十分に注意されたことだが，それを参加した１人が他のメンバーに徹底させるのは大変だったようだ。その意味でも，講習会には全員を参加させるべきだったし，生徒に任せず，指導する側としても十分に配慮すべきだったと反省している。しかし，本質的には慣れの問題で，結論からいえば，適切な指導があれば一年生でも十分に「ディベート」はできるという感触を得た。過去の経験と照らし合わせてみても，最も充実したディベートができたように思う。生徒の所感をみても，この１年では「ディベート」の印象が最も強く，充実感を得ている生徒が最も多い。それは，単に記憶に新しいだけではなく，本来的に，相手を論破する，さもなくば論破されてしまうという「ディベート」のシチュエーションに強い興味関心を示したからだと考えられる。その背景には，「ディスカッション」「グループ研究」を行ってきた経験を生かして，周到に準備する力がついていた，ということもあろう。「準備をすればするほど，立論の時間が短く感じる。」「まとめるのがもったいない。調べたことを全部発表したかった。」など，積極的に取り組んだからこそ漏らす不満も少なくなかった。

最後に，実際にディベートを実践して，特に審査に関していくつかの興味深い結果が得られたので，反省点も含め記しておきたい。一つは審査員とオーディエンスの判定が反対の場合も

あったことだ。メリット・デメリットともに最初に示されたいくつかの立論のうち，その後の討論で最終的に何個生き残ったか，という単純な数で判定した場合，判定が逆になってしまったようである。さらに，必ず優劣をつけなければならないというルールも審査を難しくしたかもしれない。「重要性」や「深刻性」より数の論理を優先してしまうのは，重要性や深刻性を判断する知識が不十分だからに他ならない。何の予備知識もなく，当日その場だけでの情報で，誰もが納得する判定を下すというのは，相当高度な力を必要とする。審査員は事前からディベーターと情報交換をしたり，独自に準備をしておかなければならないことを痛感した。生徒にしてみれば，何とか主観に頼らず判断しようと精一杯努力した結果，数の論理を優先して機械的に判定してしまったのであり，生徒ばかりを責めるわけには行かないだろう。

もう一つの興味深い結果は，同じテーマでもクラスによって勝敗が別れていることである。これは実施日がずれたため，後に実施したクラスのメンバーが，済んだクラスから情報をよく得ていたからかもしれない。負けたグループのほとんどの生徒が「悔しい。納得できない（同じテーマで）もう１回やりたい。」と所感で述べているように，たとえゲームだと割り切っていても，負けるのは相当に悔しのだろう。ならば，同じ論題で行なった前例の結果には敏感にならざるをえない。こんな時，この教科で生徒間の相互教育力が非常に良く働いているのを実感する。

⑷　全体に関して

ここでは，１年の実践を終えた後の生徒の感想など，単元に拘らず１年を通じて感じたことを簡単にまとめておきたい。

初めに，２学期のみ１単位で行ったことについて述べておく。この時期の前半はグループ研究発表の発表に向けてのまとめや補足調査，あるいはビデオ資料の編集などの時期にあたる。後半は「ディベート」へ向けての準備の時期にあたる。全体的にオリエンテーション以外は，グループ別の活動が中心で，長時間教室に拘束しておく意味はない。実際に公立図書館へグループ毎に出むいて行くことも認めた。かえって時間教室に拘束したら，指導する方が大変である。したがって，２学期のみ１単位で実践したことについては授業をする上で特に大きな支障はなかったと考える。このことは，「国際・文化Ｉ」を１単位で実施することは不可能ではないという事を示唆している。

次に，生徒の感想について簡単にまとめておく。１年の最後に書かせた所感では，例年通り，懸命に取り組んだ者ほど，よい実感を持っているようだ。「……慌ただしさしかないと書きましたが，振り返ってみて，やっぱり色々学んだなぁと思います。ただ，先生の話を聞いているだけの授業と比べてたいへんな分，終わった実感がいいもんです。」「４月にこの授業が附高にしかないことを知って，これが附高の特色なのだという考えを自分で持つようになり，この授業でやる様々なことに念入りに取り組んでみようと思った。実際，この授業でやったことは，ある意味で他のどの授業に続するものでなく，また，ある意味では他の授業でやっていることにとても関連が深いものがあり『国際・文化』というものが明らかに他の授業とは違った個性を持つ，非常に興味深いものであったように思う。この授業において最も特徴的なことは『身近』にあるもののほとんどが，自分たちの学習の対象になり得る，ということだと思う。身の回りにある物や情報について，個人個人がそれぞれに持っている考え方が，この授業の主体となって動いていたように思えた。少なくとも，一人で何時間も机に向かいっぱなしでは到底得られないであろう感性を，この授業によって少しでも研くことができたのではないだろうか。」このような感想を述べている生徒は多い。概ね，例年通り，良い評価を得ているといえる。

一方で，「『国際・文化科』の『文化』については良く学んだと思うが，どこに『国際』があったのだろうか。」という意見も多い。今回は海外現地学習と全く切り離された授業で，外国人留学生と触れ合う機会もなく，最後まで実質的に「国際人になる」という意味の「国際」なのだということが実感として伝わらなかったのだろう。また，「『国際・文化科』が他の教科，行事，クラブ活動の負担になるということはないが，テストもなく大学入試にも関係がないので，自然と軽視してしまった。」と，相変わらず，高校の勉強は受験勉強が中心という視野の狭い価値観から抜け出せない生徒がいるのも事実である。このように無駄だと考えているのは理系の生徒に多い。「国際・文化科」を高校教育の中に根付かせることの難しさを痛感させられる。

最後に，この１年間を振り返って，改めて疑問に思うことが一つある。それについて少し触れ，この１年の反省を締め括りたいと思う。

平成８年度の「国際・文化Ｉ」は，一年の最後に，充実した「ディベート」を行わせる事を目標にして，単元構成と授業を徐々にステップアップできるよう計画し実践してきた。「ディスカッション」では，討論のルールを，「グループ研究発表」では，調査方法や資料収集，情報の整理などを，そして，「ディベート」では，緻密な論理構成をめざして実践してきた。これは「国際・文化科」のねらいである「……国際社会や地球生態系における共存・共生者として，また，……全人類的かつ地球的視野に立って，自己を認識し，多様な分野において積極的に自己の責任を果たしていく人間の育成…」を考え，構成されてきたものである。今，改めてそのねらいを考えるとき，果たしてこの単元構成が最善であったのか，特に「ディベート」を終目標にしたのが適切だったのかといえば，決してそうだとはいいきれないように思う。

実社会の現実は，簡単に白黒付けられない問題が多い。それでも，何とかしなければならない。何とか妥協策，打開策を考えなければという場面に直面するのが現実である。そんな時どうやってそれを乗り越えるのか。そういう力が最も重要なのではないか。それこそが「国際・文化科」のねらいに示されているような，生きる力，知恵なのではないだろうか。そう考えるとき，「ディベート」では，そこまでの力を十分につけるには至らないのではないかと思う。生徒の中には「もともと優劣の付けられないものを２つのグループに分けて……争ったとしても，その論題に対して本当に理解が深まるとは言えないと思う。」「ディベートで討論することは分かり，その大切さも少しは理解できたつもりだけど，なぜそれに勝ち負けを付けるのかが理解できない。」と所感で述べる生徒もいた。おそらく彼等の心の奥底には筆者と同じ疑問があり，無意識にそのことに気付いているのだと思う。「ディベート」は一種のゲームである。その教育的意義は十分に認めるが，所詮，手段であって，目的ではないのである。「ディベート」学習だけに大きな期待を寄せるわけにはいかないのである。

５．まとめにかえて

この５年間，ずっと「国際・文化科」に携わってきて，多くの成果を得たのも事実だが，今，改めて，もっと大きな課題を突き付けられたように思う。前章で述べたように，実社会では「正しい政策」だからといって，すぐ実施できるとは限らない。そんな場面に直面した時，どうやって解決するか，さらに，解決に向けて行動する力をどうやって培ったら良いのか。「国際・文化科」はそれに答え得る教科として大きな期待を寄せてきたが，未だ十分な答えを得ているとは言えまい。この５年間の実践を通して，ようやく進むべき方向が見えてきたというところだろう。その意味では，未だ，スタートラインに立ったばかりではないだろうか。

平成８年度は，各単元の学習方法や指導方法を従来以上に明確にすることを全体の目標として，各オリエンテーションについて，かなり詳細に説明したつもりである。未だ，完全である

とははいいきれないが，現時点では少なくとも，本教科が一つの目的としていた，どの教科の教官でも指導できるようにするための準備資料としてはかなり役立つ，完成に近いものが提供できたのではないかと自負している。次期指導要領の改訂では，総合教科が２単位必須になることがほぼ決定している。この総合教科はおそらく本稿で実践してきたこの「国際・文化科」と重なり合う部分が多いものと予想される。この資料は本校教官のみならず，新たに総合教科を担当する教師の福音になることを願って止まない。

なお，資料編の最後に，本校第16回研究協議会での分科会の発表で使用した，本校の平成４年度（46回生）から平成７年度（49回生）までの「グループ研究」に関する分析資料と若干の解説を掲載した（〈資料Ｃ〉）。合わせて何かのお役に立てたら幸甚である。

最後に，平成８年度の「国際・文化Ｉ」を実施するにあたり，金沢市泉野図書館の職員の方方，日本教室ディベート連盟の方々には大変にお世話になった。記して感謝する次第である。

（注１）ビデオ編集は本校に編集機がないために泉野図書館のビデオ工房を利用した。ビデオ工房利用に当たっては，事前に「ビデオ編集講習会」の受講を必要とし，筆者の他，本校島村教官が受講した。講習会は初級講座と上級講座があり，初級受講者は簡易編集機（アッセンブル編集が可能）の，上級受講者はより高度な編集機（インサート編集が可能）の使用許可が得られる。なお，教官以外でも数名の生徒が自主的にこの講座を受講した。また，本校荒木教官は過年度に受講済みであった。

〈参考文献〉

・海保博之「わかりやすい表現」（1998）福村出版
・J. レイボー／M.A. チャーネス／J. キッパーマン／S.R. ベイシル著（丸野俊一，安永悟訳）「討論で学習を深めるためには」（1996）ナカニシヤ出版
・松本　茂「頭を鍛えるディベート入門」（1996）講談社ブルーバックス
・藤岡信勝・監修，上條晴夫・著「シリーズ教室ディベート　―中高生のためのやさしいディベート入門」（1996）学事出版
・北野宏明「ディベート術入門」（1995）ごま書房

〈資料A〉50回生「国際・文化科」第１回　オリエンテーション

５０回生　国際　文化Ⅰ　第１回オリエンテーション　　1月11日(木)

1「国際　文化科」とは

◎文部省，高等学校学習指導要領，第１章　第２款の４　「その他特に必要な教科」として本校が独自に設置した教科，平成４年度より三ヶ年にわたり，文部省に指定され開発研究を進めてきた教科で　現在も継続して行なっているものである。

(1)「国際　文化科」のねらい

現代は地球上の様々な情勢や環境の変化が　直接我々の生活に影響を及ぼし　また，我々一人一人の行為が　国際社会や地球環境に大きくかかわっていく時代である。我々は　今や国際社会や地球環境と切り離しては，自己の生活が成り立たない時代に生きている。

このような時代の中では，国際社会や地球生態系における共存　共生者としてまた，個性豊かな文化の創造者としての資質を育て，全人的視野かつ地球的視点に立って，自己を認識し　多様な分野において積極的に自己の責任を果たしていく人間の育成がより一層望まれている。

そのためには　次のような態度や能力を生徒それぞれの個性に即して養う必要がある。

態度　①　自己の生活する地域の環境の特質を認識する態度
　　②　異質の文化や価値観を理解し，尊重する態度
　　③　自己と世界との関わりについて認識し　展望してゆく態度
　　④　自己の尊厳を自覚し　地球社会の一員であることを認識する態度

能力　①　情報を収集し，適切に処理する力
　　②　自己の意見を集約し　表現する力
　　③　自ら課題を発見し　それを解決　実践する能力

このような認識に立ち　２１世紀に生きる日本人の教育に関し，高等学校教育においても　これまで以上の配慮が必要である。

「国際　文化科」は　こうした世界認識に基づき　義務教育の成果を踏まえ　他教科の内容と密接な関係を保ちながら，総合的な立場での教育効果をより高めようとして　設置するものである。

(2)「国際　文化科」の目標

自己の生きている地域やわが国の伝統　文化，生活の特質を深く認識するとともに　異質な伝統　文化　生活を理解し　尊重する態度を育てる。さらに，地球的視野に立って，世界の人々と自己　また，自然と人との関わり方や在り方を認識し　課題を発見し　解決する能力を育てる。

※「国際　文化科」は「国際　文化Ⅰ」および「国際　文化Ⅱ」「国際　文化Ⅲ」の３科目がある。このうち「Ⅰ」は一年生で必修履修し　「Ⅱ」は２年生で必修履修。「Ⅲ」は一年生で，文系のみ選択履修できるようになっている。

(3)「国際　文化Ⅰ」の目標　内容　方法

(1)目標

自己の生きている地球やわが国の伝統，文化，生活に対する関心を深め，また，他の地域や他の国の異質な伝統　文化，生活を理解し，尊重する態度を育てる。さらに地球的視野に立って，世界と自己，また　自然と人との関わり方や在り方を認識する態度や能力を　討論や研究活動などの主体的学習活動を通して育てる。

(2)内容

① 科学と生活

科学の役割や　科学と時代・地域の関係を考察させるとともに　事故の存在や自己の生きる価値についての思索を深めさせる。

② 伝統・文化と生活

自己を育んできた地域の伝統や文化を他の地域との比較の中で理解させ　自らの生活との関わりについて思考を深めさせる。

ア）わが国の伝統，文化　生活などの特質について認識させるとともに，自己の生活に現われた思考性や文化性などを評価させる。

イ）わが国とは異なる伝統，文化　生活について認識させるとともに　互いに協調尊重する方法を考えさせる。

③ 環境と生活

自己の生活する地域の環境や生活を他の地域との比較の中で理解させ，自然と社会両面から自己の生活に対する認識を深めさせる。

ア）自己の生活に関わる様々な事物を通して　自己や自己の生活が国際社会や地球環境と密接に結びついていることを理解させる。

イ）現在　地球上に存在する様々な環境問題を取り上げ，それらの環境問題と我々の生活との関わりについて考察させる。

(3)方法

① ディスカッション　② グループ研究　③ 体験学習　　など

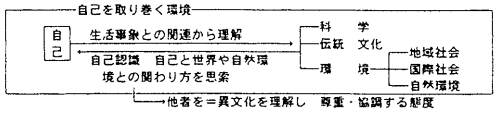
(4)内容及び方法の取り扱い

① 内容全体に関して，義務教育の内容や他教科との関連に充分留意する。

② 文献上から学ばせるだけでなく　フィールドワークなどを通して調査，体験したり　また　校外の人々との交流を図りながら　広い視野から　伝統，文化生活に関する事柄を，意識化させるようにする。

③ 討論や研究活動などでは，生徒の主体的な学習がなされるよう配慮する。

(4)「国際　文化Ⅰ」の考え方



2「国際・文化科」のねらいと国際化対応教育の視点

「国際・文化科」設置のねらい（以下「ねらい」）を策定するにあたり　現高校教育を取り巻く状況の中で，我々は国際化に対応する教育の視点から次のことを確認してきた。

① 縦割りの既存の教科では対応できないこと。とりわけ　単なる外国語の習得や，外国についての地理的　歴史的知識を伝達するだけでは国際化に対応した教育にならないこと。

② 単に国家間の関係という視点（internationalの視点）の理解だけでは，国際化に対応した教育にはならないこと。地球規模の視点（global）の視点から個々の事象を理解させる必要があること。また，その視点から自然環境と共生する態度の育成も必要であること。

③ 知識　理解など認知領域中心の教育では対応できないこと。認知領域中心の教育は既存の教科で対応されているが　全世界に関する知識は無限に広がり　知識を持っているだけでは国際人とはいえないこと。

④ 自己がよって立つ文化や伝統を認識し　他国の文化　伝統を理解するとともにそれを尊重し，文化の違いを認めた上で　異文化の人々と共生する態度を育成する必要があること。

⑤ 国際化の中で積極的に自己の役割を果たしていくためには　変化に対応して自発性を発揮できる力を養うとともに，自己を表現する力や実践能力を育成する必要があること。

3「国際　文化Ⅰ」の学習方法

「国際　文化Ⅰ」は，生徒の主体的学習によって自ら学ぶ科目である。特に，個人で課題に対しての思考や認識を深めるだけではなく　他者への活動　他者からの学習という生徒相互による学習活動を重視する。したがって，その学習は，ディスカション，グループ研究，体験学習などの方法をとる。

それを踏まえて，学習を効果的に進めるため，次の７つを留意点とする。

① 教師による教え込みを極力避けること。

② 教室内だけの学習に終わらないこと。

③ 文献のみの学習に終わらないこと。

したがって，

④ フィールドワークによる調査や体験学習を重視する。

⑤ 単一学年のみの学習ではなく　上級生を交えて学習する方式を導入する。

⑥ 外部講師や帰国子女留学生を積極的に招く。

さらに，

⑦ 積極的にコンピュータなどを使用した情報処理技能を身に付けさせる。

以上の学習活動考慮して，評価は自己評価　相互評価を中心とした点数化しない相対的評価とする。

4 平成８年度の学習方法

ディスカッション

◇ねらい　「討論活動を通し，自己表現力を身に付けるとともに　自らを知り，他者を知る」

◇学習目標
- 一定のルールに基づきながら討論できるようになる。
- 少人数の中で課題に対する自分の意見を持つ。
- 少人数の中で自分の意見を発言する能力を養う。
- 少人数の討論を通して，自他の意見の相違を発見し　相互理解を深める。
- 討論を通じ，総合的・建設的な結論を導きだす能力を養う。

◇テーマ　「日本の国際貢献は如何にあるべきか」
「男女の間に友情は成立するか」

クループ研究発表（ビデオを利用した取材レポート制作）

◇ねらい　「自ら課題を発見し　調査能力・分析力・表現力を身に付けるとともに自文化や　他文化と他文化の関係を認識し，それぞれの文化を尊重する態度を身に付ける」

◇学習目標
- 自ら課題を発見し　問題点を明らかにする力を養う。
- 自ら課題に対する資料を得る調査能力を養う。
- 取材を通じ交渉のマナーを身に付ける。
- 物事に対する客観的な分析能力，考察力を養う。
- 論理的思考力を養う。
- 自分達の見解をわかりやすく伝える構成力を養う。
- ビデオなどの機器を効果的に利用する力を養う。
- 他人の分析力，考察力を客観的に評価できる力を養う。

◇テーマ　大テーマ「自文化を外国の人たちに紹介する」（不定）
グループテーマ　グループ毎に自分たちで設定する。

ディベート

※ディベートとは　討論のテクニックのひとつ。一つの論題に対して肯定側と否定側に分けて，説得性を競う，いわば知恵のスポーツ。

◇ねらい　「身近な問題点に対する論理的接近を通し，自己および自己を取り巻く環境を認識し，視野を広げようとする態度を身に付ける」

◇学習目標
- 物事に対する客観的な分析能力，考察力を養う。
- 論理的思考力を養う。
- 反対意見の論旨を正確に聞き取ることができる。
  反対意見の論旨の矛盾点や弱点を見抜くことができる。
- 他人の，論理構成力，説得力を客観的に評価できる力を養う。

〈資料B〉50回生「国際・文化科」第２回　オリエンテーション

５０回生「国際　文化」　第２回オリエンテーション　　平成８年５月27日(月)

１ グループ研究の目的と方法

(1) 研究の目的

① 自ら課題を発見し　調査能力　分析能力　表現能力を身につけるとともに　国際化や　日本文化と異文化の関係を認識し　それぞれの文化を尊重する態度を身につける。

② 本年度は　映像(ビデオ　スライド等)による資料を活用しながら　特に　表現力を重視した　研究活動を行なう。

(2) 共通テーマ　「身近な生活　習慣　文化を見直す」

身近な日本の生活習慣や文化について再考し　問題点を発見したり　問題提起を行なったり　解決の方法を探索したりする。

(ex)「～について考える」　「～問題を解決するために」など

（資料１）これまでのグループ研究テーマ一覧参照のこと

(3) グループ編成について

①グループ分け　１グループの人数は６～８人　各クラス６グループ。

＊出来れば男女混合が望ましい。

＊各グループで　出来ればビデオカメラ(ハイ8)を準備できることが望ましい。

両　8ミリビデオの場合は　VHSに変換しないと高度な編集は不可能。

また　学校のビデオは貸し出しません。

②グループ内の役割

＊以下のような役割分担をするが、原則として全員で協力すること。

班　　長　まとめ役　研究プロット作成の責任者　渉外係

記　録　係　研究中の討論記録(メモ)　各種提出物の記載の責任者

発　表　係　レジュメの作成責任　当日の研究の発表　司会

ビデオカメラ係　取材中のビデオカメラの担当

インタビュー係　取材中のインタビュー　アフレコ担当

ビデオ編集係　ビデオ編集　効果　音響担当の責任者

(4) 研究作品のレベルについて

レベル１　主として口頭による発表＋副としてスライド　OHP資料を利用する。

レベル２　主として口頭による発表＋副としてビデオ資料を利用する。

＊ビデオ資料は自分達でできる程度の編集を施したものを利用する。

レベル３　主としてビデオによる発表＋副として口頭による説明　解説を行なう。

＊ビデオ資料はタイトル　テロップまでの編集を施したものを利用する。その際　編集は景野国際館で　担当教官と共に行なう。

＊ビデオには、BGM、アフレコを施したものを利用することも可。

(5) 研究の発表について

①時間　１グループの発表に関する時間は50分です。内訳は以下の通り。

グループの研究発表　30分以内(準備も含む)

発表後の質疑応答　10分、評価表の記入10分

②発表資料(レジュメ)の作成

発表に際しては　必ず研究発表の流れがわかる程度の　以下のようなレジュメを併用する。レジュメは　必ずワープロまたはコンピュータで作成すること。

（Ｂ４見開き）

班　番　班メンバー　　氏名　　担当教官	③
(1)研究テーマ	
(2)研究目的　なぜこのテーマを選んだか 　　身近テーマとの関連	(5)考察　まとめ
(3)調査方法 　どこで　誰　どのように調査したか	
(4)調査結果 ① ②	(6)参考資料　協力者

③評価（相互評価）

聞く側は各日　下記のような観点別評価表(後日　提示します)に従って　発表の評価を行なう。各日の総合評価にクラス担当教官の総合評価を加えて　各クラスの最優秀研究グループを選ぶ。

＊観点別評価

研究方法　調査方法　調査内容、分析の的確性　展開の論理性、結論の妥当性　妥当性

発　表　発表態度　レジュメの見易さ　質疑応答の適切さ

ビデオ資料の元成度　効果的利用・表現方法の工夫

総合評価　研究発表全体の評価　研究の独創性　熱意、

グループのまとまりなど

＊発表に際して　聞く側は必ずメモを取り　事実関係について、質問・提同できるようにする。

2.研究の手順

＊大きな流れ　「課題発見」→「調査　分析　考察」→「発表　表現」

(1) グループ編成、役割分担

↓

(2) 事前調査　身近な資料などによって課題を想定し　仮テーマを決定する。

＊仮テーマに基づいて　助言教官を決定する。

↓

(3) 仮テーマに従って資料を収集（主に文献調査による）し　集めた情報分析　考察して仮説をたて、今後の研究構想を練る。

＊その際　映像資料の効果的利用を念頭において。

↓

(4) 仮説　研究構想に従って、実地調査や取材の計画をたてる。また　ビデオ撮影による取材計画（映像シナリオ）を作る。

＊「グループ研究調査計画書」書を記入。

↓

(5) 調査　取材　撮影

↓

(6) 収集した情報を分析　考察し　研究を要とめる＝主張点を明らかにする。

↓

(7) 研究発表のためのビデオの編集を行なう。

↓

(8) 発表準備(レジュメの作成)　発表リハーサル

↓

(9) 発表本番

3.今後の日程

5月27日　①第２回オリエンテーション　グループ研究発表の進め方

②グループ分け　役割分担（①グループ編成表(資料１)提出）

③研究テーマ検討

6月３日　①第３回オリエンテーション

ビデオ取材の方法　上手なビデオの使い方　ビデオシナリオの作り方

②研究テーマ検討、研究概要書(資料２)提出

（＊助言教官の決定）

6月17日　研究　調査、教官の助言　（自調査　取材許可願い書）郵送

6月24日　研究　調査(郊外施設利用も可)　教官の助言、

7月１日　「取材計画表(資料３)」および「取材　撮影許可願い」提出

夏季休暇　取材

9月２日　発表準備、ビデオ編集　など、発表順決定(くじ引き)

9月９日　発表準備　ビデオ編集　発表資料作成

9月30日　発表日①　10月７日　発表日②　10月14日　発表日③

4.調査の方法

(1) 各種文献資料とその入手方法

＊文献資料には、研究文献や統計書、白書　新聞、雑誌などがある。これらは研究テーマや研究方法などを決めるための事前調査　または　研究中の仮説の検証や取材調査のまとめ方などに指針を与えてくれるものとして利用する。

＊研究内容によって指導教官の助言を得て　資料入手先を確認すること。

① 図書館(本校　金沢大学、公立)で入手できるもの

研究論文、書籍　新聞・雑誌記事、統計書、白書など

＊新聞資料については、本校のパソコン通信でもすべて検索できる。また「日本国勢図会」「世界国勢図会」「イミダス」「現代用語の基礎知識」などは学校にもあります。

② 各種白公刊行物

×県庁看板向かいの「合同庁舎”１Ｆ、「政府刊行物コーナー”でもえる。

◇各種白書　経済白書、公害紛争処理白書、首都圏白書、防災白書　上地白書、警察白書、交通安全白書、公務員白書　通信白書、中小企業白書　運輸白書　環境白書(総論　各論)　通商白書(総論　各論)、地方財政白書、原子力白書、原子力安全白書　科学技術白書、世界経済白書　国民生活白書、消防白書　海上保安白書　犯罪白書、建設白書、外交青書　青少年白書

＊この内、主要なものは学校(図書館　会議室)にもあります。

◇総理府統計局　サービス業基本調査報告第１巻全国編　など

(2) 現地聞き取り調査　取材

＊現地調査は　事前の文献調査で明らかにできないもの　現地で確かめておくべきものなどを実証的な資料を収集するために行なう。その際　助言教官と綿密な打ち合せをし、以下の点に留意して行なうこと。

① 事前に現地で調査する内容　事項を細部まで決めておくこと。

② 現地でしか入手できない資料(地図　説明書　統計)などをいただいてくる。

③ 相手方に対し礼節を尽くすよう以下の方法で行なうこと。

電話でのアポ→「取材願い書」「撮影許可願い書」郵送

→調査取材時間　内容などの確認

→調査取材

→御礼状　研究発表レジュメコピー郵送

④ ビデオ撮影にあたっては　すべて許可を得ること。特に人物の場合は　本人の了承を得ること。

⑤ 宗教団体や政治団体などには　安易に聞き取り調査に行かないこと。

⑥ 原則として　日帰りが可能な範囲で調査　取材に行くこと。

、これまでの聞き取り調査　アンケートの事例。

日本の庭園(46時)→石川県庁土木港公園緑地化　石川県兼六園管理事務所

日本人のダイエット観と外見的美意識(46時)→ソノエデエステ銀座ワールドプロポーションユニー，たかの友梨ビューテークリニック

やっぱり気になる家相(46時)→ＭＡＣ建築研究所

民事介入暴力と暴力団対策法(47時)→金沢中警察署刑事第１課，北尾法律事務所

故，今，若なのか(47時)→中本製茶(株)

楽しきかなファミリーレストラン(47時)→スカイラーク，COCO'S あっぷるぐりむ

マルチメディア(48時)→ＮＴＴ金沢，ＮＴＴぷらざ　北国新聞社，

今時の子供(49時)　浅小ノ校，附属高校一年生，附属中学校一年生　近所の方々

(3)その他の資料の収集方法の事例

ＴＶ番組特集　ニュースステーション（結婚）

映画　「ミンボーの女」（民事介入暴力と暴力団対策法）

張り込み調査　ファミリーマート２４時間張り込み調査（コンビニエンスストア）

食べ比べ，飲み比べ　多数あり。

＊面接アンケートは許可しない。

（資料１）グループ編成表

１年　　組
メンバー　班長 ＿＿＿＿　＿＿＿＿　＿＿＿＿　＿＿＿＿ ＿＿＿＿　＿＿＿＿　＿＿＿＿　＿＿＿＿
仮テーマ
テーマについて話し合ったこと

（資料２）研究概要書

１年　組　班メンバー　氏名　記入者	(5)調査方法 どこで　何を　とのように調査するか
(1)メンバーの役割分担	
(2)研究テーマ	
(3)研究目的　なぜこのテーマを選んだか 共通テーマとの関係	(6)映像資料利用計画
(4)予想される結論(仮説)	

（資料３）取材計画書

１年　組　班　取材者	(4)取材内容
(1)取材場所 連絡先・責任者	
(2)取材目的	
(3)取材日程	

〈資料Ｃ〉本校第16回研究協議会　分科会資料（「グループ研究」に関する資料）

※本稿用に一部改編，削除した。

表１．回生別グループ構成（男・女・混合）

回　生	男子のみ	女子のみ	混合グループ	合　　計
46	23グループ	16グループ	0 グループ	39グループ
47	18	11	8	37
48	21	15	0	36
49	17	14	1	32
50	1	1	15	17
計	80	57	24	161

※47回生と50回生は，男女混合グループを勧めた。特に50回生はビデオ撮影等が「条件」となったため，自発的にグループを男女混合にしたようだ。

◉人気テーマ分野

	１　位	２　位	３　位
男子グループ	社会・情報	食（食文化）	趣味・娯楽，政治（法律，国際）
女子グループ	社会・情報	衣（化粧・ファッション），趣味・娯楽	食（食文化）
混合グループ	環境	食（食文化）	文化（伝統文化，価値観），環境
全　　体	社会・情報	食（食文化）	民俗・風習

図１．テーマ別割合

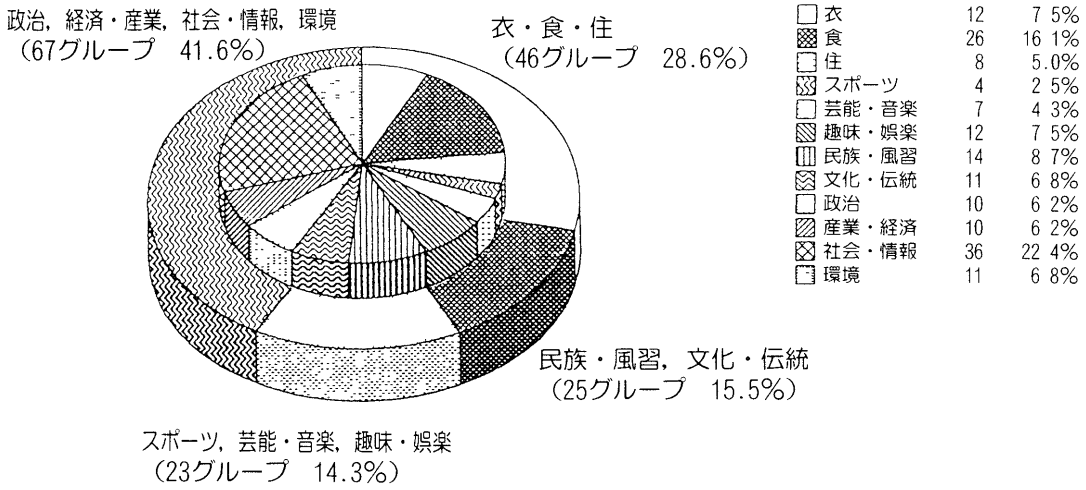


図２．グループ構成（男・女・混合）別　細分テーマ割合

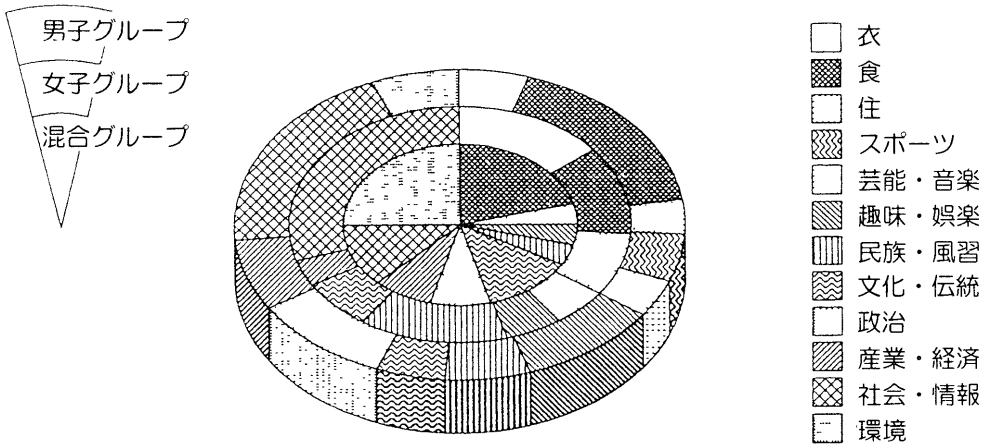
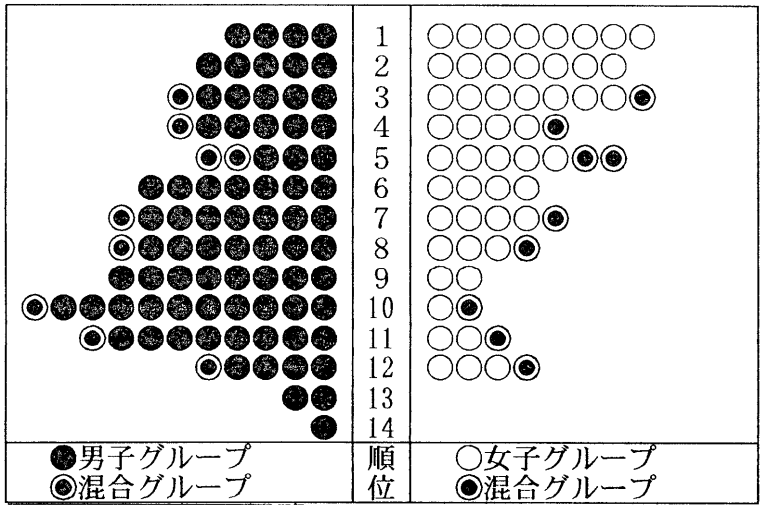


図３．グループ構成別順位（46～49回生）



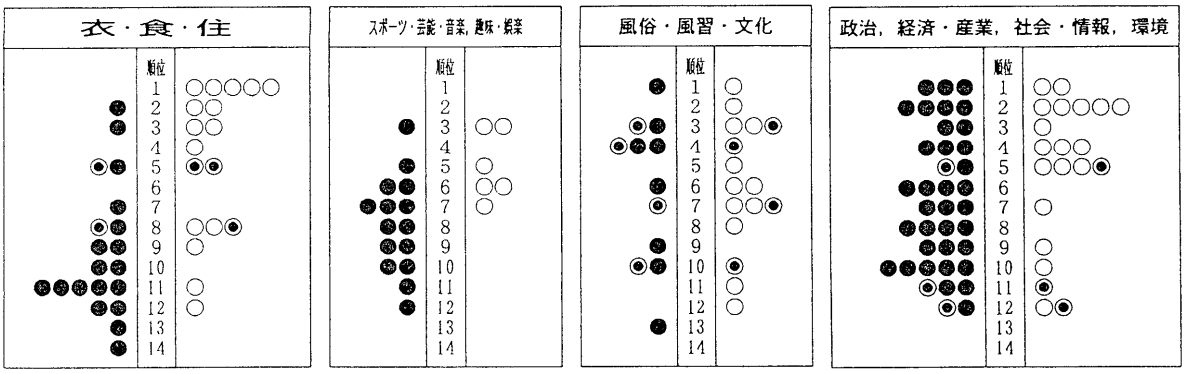
※混合グループは，男女で重複している。

※全体的に見れば，女子が良く健闘していることがわかる。

※男女混合グループは，まとまりがあるかないかで，評価が別れてしまうようだ。

※※同点順位があるため，合計は合わない。

図４．テーマ分野別順位（46～49回生）



●男子グループ，○女子グループ，◎混合グループ

※「衣・食・住」では男女差が大きかった。特に男子は，試食を主とした手抜きの研究が目立った。

※「スポーツ，芸能・音楽，趣味・娯楽」では，個人的な興味関心を追求したものが多く，同じ興味関心を示さない生徒にとっては，退屈な研究になりがちで，高い評価を得にくかったようである。

※「風俗・風習・文化」では，特に大きな特徴はないが，男女混合グループが多かったのが唯一の特徴。

※「政治，経済・産業，社会・情報，環境」では，男子グループの多さが目に付く。また，女子のみならず，男子でも上位の評価を得ているのもこの分野の特徴である。

表２．50回生，クラス別最優秀グループの分析（評価表より）

評価項目		評価の要件	各組最優秀グループの最高評価(5)の個数 A組	B組	C組	合計
研究方法	調査	調査方法の妥当性 調査内容の深さ，広さ	26	21	13	60
	分析考察	調査分析の的確性 展開の論理性 結果の客観性，妥当性	19	26	13	58
発表		態度 声の大きさ，聞き易さ 質疑に対する応答の適切さ	27	17	14	58
		機器の効果的利用など 表現の工夫	27	18	19	64
レジュメ		見易さ，わかりやすさ 資料の有用性	21	23	13	57
独創性		テーマ設定の独創性 調査・発表方法の工夫 結論の独創性	19	22	12	53

※評価項目別に見ると，発表の際の機器の利用に対する評価が若干重要視されているが，全体的に見ても大差なく，全ての評価項目が大切だということが分かる。所感をまとめても，同様なことが伺えた。

※本文中にも述べたが，B組は，機器の利用より，「分析・考察」や「レジュメ」が重要視されたことも分かる。